

American Style, Art as Tools for Engagement

# アメリカ流、アートの仕掛け 「エンゲージメント」

クリエイティブエコロジー社 菊池宏子

## 【要約】

アメリカでは、コミュニティ・デベロップメント領域において、アートを道具とし、新しい姿のコミュニティづくりで人々が活躍しています。コミュニティ・デベロップメントの表現分野を活発にし、円滑にする為に重視されているのが「エンゲージメント」という理念と機能であります。コミュニティにおける思想や心情の立ち位置を熟知し、相手目線で多様な発想を展開し、地域のニーズを鮮明にしている。集められた「ひと資産」を戦略としてまとめ、プログラム化し、そして具体的な「もの」に可視化する。これがエンゲージメントであり、こんな仕事形態が成長したのです。残念ながら、日本においては、未だに、この表現分野は未熟であります。エンゲージメントの醍醐味を知ってもらうために、アーティストの手で、つながりによって豊かなコミュニティ再生がされている三つの事例を紹介します。どれも全く違ったコミュニティとの関わり合い方がなされています。

## 【キーワード】

アート、コミュニティデベロップメント、エンゲージメント、アメリカ、コミュニティデザイン

アメリカでは、アートを道具とし、新しい姿のコミュニティづくりで人々が活躍しています。

1960年代、まだまだ良き時代のアメリカで、様々な社会問題が表面化し、経済至上主義の反動ともいえる多民族国家ならではの動きが萌芽しました。少数の人々が風変わりな事を始め、それが次第に大きな動きとなり、アメリカが変わりだしたのです。その動きの中に、地域と国・行政が歩み寄りながら最も良い解決方法を開発する過程、つまり、ある意味の表現分野として「コミュニティ・デベロップメント」が生まれました。この新しい動きは、「市民参加によるコミュニティ・デザイン」とも言われるように発展し、「壊れてしまったまちを再生しよう」、「古くなったまちに新しい命を芽吹かせよう」、そして、「まちづくりプロセスに参加しよう」という新しい観点から、地域との関わり合いの試みが社会の新たな

価値となったのです。アートと社会の関係がより密接になることが望まれ、リレーショナルアート、ソーシャルアート、そして今日では、ソーシャルプラクティスなど呼ばれる現代アートの「表現分野」も成長しました。

コミュニティ・デベロップメントの表現分野を活発にし、円滑にする為に重視されているのが「エンゲージメント」という理念と機能であります。「ものごとのかみ合い」とか「つなげる為の手足的要素」と考えるとわかり易いかもかもしれません。「エンゲージメント」の仕事に関わる人は、例えば、コミュニケーション・マネージャー、コミュニティ・オルガナイザー、エドューケーター、そしてアーティストであり、地域を豊かにするために必要不可欠なパイプラインをつくる人々です。少し言い方を変えれば、新時代の土木作業の仕事のようなことであるといえま

す。コミュニティにおける思想や心情の立ち位置を熟知し、相手目線で多様な発想を展開し、地域のニーズを鮮明にしていく。集められた「ひと資産」を戦略としてまとめ、プログラム化し、そして具体的な「もの」に可視化する。これがエンゲージメントであり、こんな仕事形態が成長したのです。残念ながら、日本においては、未だに、この表現分野は未熟であります。

エンゲージメントの醍醐味を知ってもらうために、アーティストの手で、つながりによって豊かなコミュニティ再生がされている三つの事例を紹介します。どれも全く違ったコミュニティとの関わり合い方がなされています。

### **プロジェクト・ロー・ハウス (Project Row Houses) リック・ロウ (Rick Lowe)**

テキサス州・ヒューストン市の事例です。歴史的地区「Third Ward」は、アフリカ系アメリカ人が多く住む地域として知られています。1993年、リック・ロウは、大学卒業後、衰退しきっていたこの地域に拠点を移し、ショットガンハウス<sup>1</sup>と呼ばれる集合住宅型のテラスハウスを使い、アートを核にしたコミュニティ開発事業プロジェクト・ロー・ハウス NPO 法人を創立しました。

ヨーゼフ・ボイスの生き方自体がアートという「社会彫刻」の思想に基づき、彼の恩師である著名なアーティスト、ジョン・ビガー教授(1924-2001)が提唱した、効果的な地域コミュニティ形成である「アートとクリエイティビティは生きる為の一部であるべき」という考えを具体的にしました。「コミュニティそのものがアートフォームであり、我々の変化・移り変わりを描き出すキャンバスでもある・・・プロジェクト・ロー・ハウスは、アートに対する熱い思い(Passion)と、人々が受ける苦しみへの深い理解(Compassion)がぶつかり合った世界に迷い込んだような所だ<sup>ii</sup>」とロウ氏は説明しています。現地に足を踏み入れてみると感じるのですが、住民の地域に対する愛情と誇りが伝わってくるのです。

ここでは、エンゲージメントのスキームとして、レジデンスプログラムを多く取り入れています。次の2つプログラムを紹介しましょう。この地域の大きな問題のひとつが、低所得者層の若年出産です。経済的自立が計れない若者を対象にして、ヤングマザーレジデンスプログラム(Young Mother

Residential Program)という実践的なプログラムが構築されています。「子育ては村の中であるもの」というアフリカで生まれた格言に基づき、若い母親達の生活支援と更生によって、共同生活を通じ、同じ境遇の仲間と共に、カウンセリングを受けながら親としてのスキルを学びます。アートを通してクリエイティブな活動も組み込まれており、現実の生活環境から隔離された、彼らが教育を受けやすくする為の環境整備が確保され、安心して子育てができるのです。もう一つのプログラムが、ヒューストン美術館付属・グラッセル美術学校とのパートナーシップ事業として企画されたアーティスト・イン・レジデンスです。大学のコア・レジデンス・プログラムを履修する学生が実際の生活体験を通して、地域のメリットとなる表現作品を作り、地域活動に参加するという仕組みになっています。敷地内では各種の展示スペースが設けられており、パブリックアートとしても作品が共有できるように工夫され、アートによるコミュニケーションの場が創成されています。

この事業の成功によって、皮肉にも、その地域の地価が上がり、高級な住宅地と化してしまっていたのは残念なことです。2003年には、姉妹団体としてコミュニティ開発法人 Row House Community Development Corporation が新設され、低所得者層向けの住宅開発計画が構築、原点に立ち返った地域開発が再開されました。ライス大学の建築学科の学生などを巻き込み、新規なデザイン性を重視し、地域性や歴史的景観が反映される地元エッセンスをたっぷりと表現した住宅施設を計画・建設しているのです。

### **オペレーション・ペイダート (OPERATION PAYDIRT)**

**メル・チン (Mel Chin)**

プロジェクトの発端は、2005年夏、ルイジアナ州ニューオーリンズを襲った大型ハリケーン・カトリナ災害にありました。以前からの鉛汚染問題がクローズアップされていたのですが、災害を切っ掛けにして、将来を担う子ども達の健康が注目され、『子供への有害な環境に終止符を打つ』ということのスローガンにした、オペレーション・ペイダート(つまり、一攫千金大作戦)が開始されたのです。ちょっと挑発的なネーミングですが、コミュニティ

再開発に向けた鉛中毒撲滅活動の代表事例となりました。

その活動の一環として「FUNDRED<sup>ii</sup>DOLLAR BILL PROJECT」があります。チン氏は、アメリカ合衆国環境保護庁が設定した危険数値基準を大幅に越えた汚染が、神経系の障害にとどまらず、こども達の学習障害、青少年犯罪や非行などが誘発される恐れを科学的・学術的に検証することによって、専門家と共に除染技術である「Treat-Lock-Cover<sup>iv</sup>」を導入することを計画します<sup>1</sup>。ところがニューオリンズ全域の除染にかかる費用が約3億ドルに達することが判明したため、賠償責任を国に請求するという大胆な戦略に打って出ます。つまり、こども達が創るFUNDRED札（1枚につき\$100）を300万枚集めて、総額「3億ドル相当のアート作品」を国に買い取らせることによって、除染費用を工面しようとしたのです。批判はあるかもしれませんが、まさに、アートを戦略的なエンゲージメントのツールと考え、地域の再生に向けて動きだします。

学校や公共施設でワークショップを展開し、それぞれの思いを込めて「象徴的な芸術作品としての100ドル札」を描き上げ、趣旨を説明した上で、その偽FUNDREDドルを寄付します。ニューオリンズで集められた6000枚のFUNDREDドル紙幣は、パブリックアートとして立てられた大型金庫SAFEHOUSEへ寄贈され、金庫の中は、地域の集会場所として機能も担いました。現在では、同様な問題を抱える他の地域からの要望もあり、ウェブサイトから自主的に活動できるようにワークショップのマニュアル化も計っています。2010年には、100カ所以上にも及ぶ地域で、「偽の武装車に乗り込んだ偽の警備員によってアメリカ横断の資金回収巡業パフォーマンス」というイベントも行われました。

このような活動は、環境汚染に対する問題意識の風化を防ぐ役割を担っています。アメリカ疾病管理予防センターの予算が削減されるなど、軌道修正も余儀なくされましたが、現実的な解決に向けて地道に現在も継続的に続き、協力・賛同する人々の層は年々厚くなり、鉛中毒問題に取り組む民間団体やマサチューセッツ工科大学コミュニティ・イノベーションラボなどが参画して、チン氏を中心に、毒物学、教育学、公衆衛生、環境科学、犯罪学の専門家による異分野連携の新チームが編成され、その活動が活

性化しています。

## マーケット・メイクオーバー (Market Makeovers) パブリック・マターズ (Public Matters)

最後の事例は、「Food Desert (食の砂漠)」と呼ばれ、地域の再生活動をするパブリック・マターズの話です。彼らは、パートナーシップありきの有限責任会社(Limited Liability Company)をアメリカ各州法に基づいて設立して、コーポレーションとパートナーシップの中間的な性質を持つ企業組織を運営しています。特に、マルチメディア・エデュケーションや、市民参加型(シビック・エンゲージメント)の戦略を提供することで、食と地域の問題解決策を編み出しています。

カリフォルニア基金の援助で活動するサウス・ロサンゼルス地域において、2007年から、支援活動団体HEACと協力し「マーケット・メイクオーバー」プロジェクトを試行的に立ち上げました。このプロジェクトでは、地元高校生とのコラボレーションにより短編ビデオを制作する活動、市民によるアドボカシー活動、安全で健康を促す食料提供する店舗外観の建設、そして、営業形態のリフォーム活動を行っています。経済的弱者が住む地域にとって、「食と健康」の問題は深刻なものであり、まず、彼らは、物理的な場所をリノベイト(再成)することによって、食習慣を根底から変革するためのエンゲージメントの仕組みを実施しています。なお現在は、2010年からの5年計画で、カリフォルニア大学ロサンゼルス校のCenter for Population Health and Health Disparitiesと共にイースト・ロサンゼルスの問題に取り組んでいます。

このプロジェクトの課題でもありますが、食習慣は個人の問題になりがちであり、当事者が問題の重さを自覚しなければ、自発的には事は進まず、地域社会の再生は発芽しないのです。そのような教訓も踏まえ、地域住民を巻き込んだ上で、徹底したオーナーシップ志向の戦略が計画されるようになっていきます。正しい情報を適切に提供し、食習慣に関する知識を積み重ね、そして、当事者としての自覚を醸成する。このようなオーナーシップ志向の戦略を作ることによって、生活習慣の公正が実現すると考えます。

### 三つの事例から何を学ぶべきか

「コミュニティ・デベロップメント」とは、生命力が感じられる地域をいかにして作るのかということです。そのためには、21世紀型の表現分野で働く職人を育成することが最も大切なことであると考えています。アメリカ流の三つの事例は、それぞれ、具体的な体系的なテーマ(例えば、貧困に絡む根源的な複合課題を解決することなど)を持っています。そして、そのテーマに基づく表現分野が展開され、それぞれの地域の生活に根を張っています。それゆえ、生活をする人が共鳴し、当事者として責任を持った行動が起こせる地域再生のグランドデザインを作ることから始めるべきでしょう。

「ひと」は、秘めた能力、見えない才能、隠された工夫の技を持っています。しかし、「ひとり」ではそれらを見つけ出すことができません。「ひと」と「ひと」が触れあって、古いスタイルのコミュニティ(共同体)ではなく、生命力をもった表現のコミュニティへの道が開かれます。

「はかないもの」を可視化して表現して、そして、残す。心の内側を人々が知り、そして、心に響かせ刻み込む。これを繰り返す、繰り返す、そして、さらに繰り返す。表現が積み重なるのです。その結果、その土地に豊かな「まち」、「環境」、「社会」そして、「ひと」が生まれます。

これが、私が考える「つながったコミュニティの基本図式」です。アメリカ流のアートの仕掛けが示すように、「もの」や「かたち」だけではありません。「知」や「こころ」の財産が溢れてこなければなりません。当然のことですが、「ひとづくり」こそが「まちづくり」なのです。そして「ひとづくり」の過程には、身近なところを見つめる力、個人がもつそれぞれの未来想像力を尊重する豊かさ、そして、そのことに共鳴する包容力が必要なのです。

——注——

- i. <http://ja.wikipedia.org/wiki/ショットガンハウス>
- ii. プロジェクト・ロー・ハウスウェブサイトより
- iii. FUNDRED は FUN(楽しむ)FUND(資金・基金)の両方の意味合いを込めてそこにHUNDRED(100)の語尾と合わせてFUNDREDという造語である。

- iv. <http://www.fundred.org/about/operation-paydirt.php>
-